イェス様こそ真のメシア、ホサナ！

マルコによる福音書11章1～11節
2023年2月26日
松田 基子 師

2月22日から受難節に入りました。 今年のイースターは4月9日です。 この期間、日曜日は主の復活を記念する日ですから、これを除いて、40日間が、イェス様が私達の罪を負って身代わりの十字架に架かり、人類の罪を贖い、救い出してくださった事に、心から感謝して、私達自身の罪を悔い改める期間です。 毎年、受難節はやって来ます。 惰性に流される事無く、一層イェス・キリストの愛の深さを知り、**その愛に応える者でありたい**と思います。

さて、イェス様は十字架を覚悟してガリラヤを後に、十二弟子を連れてエルサレムに向かわれました。 時は過越祭を祝うために、エルサレムに向かう巡礼の時期でした。 国の内外から多くの人たちがエルサレムに向かって巡礼の旅に出ました。 イェス様の一行も巡礼者達に混じってエルサレムに向かいました。

一行はエルサレムの東側にそびえるオリーブ山近くまでやってきました。 オリーブ山について、ゼカリヤ書14 章4節には、

「その日、主は御足をもってエルサレムの
東にある、オリーブ山に立たれる」

と預言されています。 イェス様はここから、行動を開始されるのです。 この先、道はベタニアからベトファゲそして、エルサレムへと続いています。 イェス様はここまで来られると、真のメシア、救い主としての行動を開始されました。 先ずなさった事は、これから城壁に囲まれているエルサレム城内に入って行かれるにあたって、ご自身が真のメシアであることを証しするために、ゼカリヤ書の預言を成就させる事でした。

ゼカリヤ書9章9節には、

「娘シオンよ、大いに踊れ。 娘エルサレムよ、
歓呼の声をあげよ。 見よ、あなたの王が来
る。 彼は神に従い、勝利を与えられた者、
高ぶることなく、ろばに乗ってくる、雌ろばの
子であるろばに乗って。 わたしはエフライム
から戦車を、エルサレムから軍馬を絶つ。
戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げ
られる。 彼の支配は海から海へ、大河から
地の果てにまで及ぶ。」

これが、神様が遣わされる真のメシアの姿でした。

ですからイェス様は、預言されている通りに、ロバの子を必要としておられました。イェス様は2人の弟子をお呼びになり、2節で、

「向こうの村へ行きなさい。 村に入るとすぐ、
まだだれも乗ったことのない子ろばのつない
であるのが見つかる。 それをほどいて、連
れてきなさい。 もし、だれかが、
『なぜ、そんなことをするのか』
と言ったら、
『主がお入り用なのです。 すぐにここに
お返しになります』
と言いなさい」

と命じられました。 ところで、ここでこだわる人は、

「イェス様ともあろうお方が、
ずいぶん勝手な事をなさるものだ」

と言うのですが、イェス様にはそれだけの権威があり、その権威に従う事が、どれ程の祝福なのか、それは従った者にのみ与えられる喜びです。

2人の弟子はこの時、イェス様に、

『そんな勝手な事は出来ませんよ。 それより
まだこれから行く村に、本当にそこに、誰も
乗った事の無い、ろばの子がいるかどうか分
かりません』

等とは反論しませんでした。 2人の弟子には

イエス様に対する信頼がありました。 これまでイエス様が言われたことで、その通りにならなかったことは一度もありませんでした。 2人はイエス様に言われた通りに、イエス様の言われた言葉を信じて出かけました。

すると表通りの戸口に、子ろばの繋いであるのを見つけたのです。 イエス様が言われた通りではありませんか。 2人は宝物が見つかった様に喜びました。 そしてイエス様に言われた通りに、子ろばの綱を解きました。 すると、五節に、そこに居合わせた或る人々が、

「**その子ろばを解いてどうするのか**」

と尋ねてきました。 2人はイエス様に言われた通り、

「**主がお入り用なのです。 すぐにここにお返しになります**」

と答えました。 するとそこに居合わせた人たちは子ろばを連れて行くことを許してくれました。この人たちは、2人がイエス様の弟子である事を知っていたかどうか分かりません。 でも、

「**主がお入り用なのです。**」

『**イエス様が必要とされているのです。**』

の一言で、イエス様に信頼し、イエス様の必要に応えることが出来る喜びから、喜んで子ろばを差し出しました。 この時以来、どれ程多くのイエス様を愛し、信頼する人々が、

「**主がお入り用なのです。**」

と言う言葉に、喜んで、イエス様の求めに応じたことでしょうか。

そうして、御業は進められて来ました。 ところでイエス様は、その子ろばはまだ、誰も乗った事のない子ろばだと言っておられます。 神の御子が、メシアとしての使命を果たされるのです。それはまだ、使われていないものを聖別して使うことが求められました。 イエス様はこれから、真のメシアとしての使命を果たされることによって、真の救い主、全人類の真の王であることが、やがて明らかにされるのです。

しかし、**人間が期待する王**とはどんな王でしょうか。

『**力をもって**敵を制圧し、
自分達を楽にしてくれる王』

です。 当時の軍事力の象徴は軍馬でした。この時、エルサレムには、過越祭を前にして、ローマ総督ピラトが、民衆を煽動する者が現れて、ローマへの反旗や暴動を起こすことが無いようにと、ローマ軍を駐留地のカイサリヤからエルサレムに引き連れて来て、待機していました。ローマ帝国は、武力によって、地中海一圓を制圧し、ローマの平和を維持していました。

イエス様は軍事力によっては、真の平和は来ないことを、この後、

「**剣を執る者は皆剣で滅びる**」

とお教えになりました。 イエス様はゼカリヤ書に預言されていた通りに、神様が遣わされた真の王として、高ぶる事無く、ろばの子に乗って、軍馬を絶ち、戦いの弓を絶ち、諸国の民に、真の平和をもたらす為に、エルサレムに入城されるのでした。 ろばの子は、軍馬の高ぶりに反して遜り(へりくだり)を象徴しています。 **イエス様は**この世に生まれ、人の子となられて、**常に神の子**としての**自覚と権威を持って**おられましたが、人間の権威者とは全く違って、**人の最も低きに仕えることの出来る力**を持っておられました。 イエス様は弟子たちに、マルコ10章42節から、

「**異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。 しかし、あなた方の間では、そうではない。 あなた方の中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、一番上になりたい者は、全ての人の僕になりなさい。 人の子は仕えられるためではなく仕えるために、**

また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」
と教えられました。

イエス様はこれから人類の罪を一身に、その身に引き受けて、身代わりの十字架に架かり、罪を贖われるのです。 最も尊いお方が、最も卑しい罪人の罪を負って下さるのです。 これ以上の遜りはありません。 フィリピ2章6節以降には、

「**キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。 人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした**」
と、イエス様の遜りを記しています。

しかし、人間は罪に汚れ、自分の本当の姿も、償い得ない自分の罪の値も分からず、自分の罪が贖われる尊さよりも、目の前の安逸にしか、感心がなく、

『この世の安逸を与えてくれるメシア、救い主しか必要としないのです。』
イエス様は民衆のその様な心を知りながらも、唯、神様の御旨に従って行かれるのです。

イエス様はろばの子を待っておられました。2人の弟子が、子ろばを連れてイエス様の許へ戻って来ました。 この2人の弟子の名前は、記されていませんが、2人は自分達の上着を脱いで、子ろばの背に掛けました。 イエス様は上着を差し出した2人の弟子の罪も、私達の罪も、全人類の罪を負って下さるのです。 イエス様は2人の弟子が上着を掛けた子ろばの背にお乗りになりました。 そこにはシオンの丘を目指して、エルサレム巡礼にやって来た多くの人たちがいました。 彼らはイエス様の存在に気付きました。民衆の間にはイエス様に対して、メシアへの期待が高まっていました。 民衆はイエス様が、メシアであって欲しいのです。 神の力でローマを打ち倒して、自分達の生活を楽にして欲しいのです。

そんな期待から人々は、自分の服を道に敷き、また、他の人々は、野原の葉のついた枝を切って道に敷きました。 その行為は王様を迎えるときの行為でした。 民衆はイエス様に、メシアを期待して、詩編の一節を唱い交わしました。
9節には、

「**前を行く者も後に従う者も叫んだ。**」
「**ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。 我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。 いと高きところにホサナ。**」
ホサナとは幸福な喜びの叫びで、ヘブライ語で
『おお、救い給え』
と言う意味です。

詩編118篇25節の、

「**どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄を**」
から唱われました。 ただ、この時、民衆が求めていたメシアは、彼らの言葉通り、

『自分達の先祖が誇りとした、ダビデ王家の復興をもたらせて、自分達を楽にしてくれるメシア』
でした。 その事を彼らはイエス様に期待したのです。 イエス様は確かに、民衆からホサナ（主よ救い給え）と歓呼されて、エルサレムに迎えられました。 しかしイエス様は、彼らの思いに従われることはありませんでした。
イエス様は子ろばを返されると、神殿に向かわれ、境内に入り、辺りの様子を見て廻られました。
イエス様の目には、

『神様への信仰はそっちのけで、

両替人や、犠牲の鳩を売る人々の姿』
が目に入ってきました。 イエス様はその様子を
じっと御覧になり、一言も言葉を発する事無く、
心に憂いて、境内を出られました。早や夕暮れ
がせまっていました。12人の弟子達を連れてオ
リーブ山の麓の村、ベタニアに向かわれました。

ベタニアで一夜を過ごされると、再び
エルサレム神殿に上ってこられるのですが、
『イエス様は神殿で、神の名を用いて商売
をする人々を追い出し、イスラエル宗教の
最高指導者達と対決され、遂には、神に
呪われた者に仕立てられて、神の民に
対する最大の侮辱である、異邦人の手で、
十字架に架けられる』
のです。 イエス様に、
「**ホサナ・・・・ホサナ・・**」
と歓呼した民衆は、一変して、
「**十字架に付けよ、十字架に付けよ**」
と狂い叫ぶのです。 十字架につけられた
イエス様を、民衆はおろか、弟子たちさえ、
『このお方が神様が遣わされた
真のメシア救い主である』
とは、信じる事が出来ませんでした。

その事は、今日の私たちにも問われています。
イエス様は何故、それ程までに、低きに降られな
ければならなかったのでしょうか。 神の子の命
に全人類を救う力があるのなら、なぜ、あの様に
嘲られ、辱められ、人間には耐えられない、
十字架の痛みと苦しみを負われなければ成らな
かったのでしょうか。 苦しみのない死で、
良かったのではないでしょうか。 イエス様は、
敢えて、その道をお選びにはなりませんでした。
それは私たち人間を、限りなく**愛し**て、誰よりも
低く、その**一番底**で、
『私がここで、**神の子の命を賭けて
支えている**から、**誰も大丈夫**だよ』
と、その愛をお与えになったのです。

救われる価値なき私達を、それ程尊んで下さ
るイエス様を、**私の真の救い主メシアと信じ**、自
分の本心である、**罪をかくしている**、自分の**心の
上着を脱いで**、その上に、イエス様に座って戴き、
私達自身が**ろばの子となって**、これからの人生
を、**命の道を**、**歩んで行こう**ではありませんか。

お祈りをいたします。
憐れみ深い天の父なる神様

ご自身のご愛と、イエス様のご愛に、心から感
謝します。 罪の滅びが、どれ程の絶望かも分
からず、イエス様の十字架の、贖いの上に、安
住しようとする、この深い罪をお赦し下さい。

罪を隠している心の上着を脱いで、その上に
イエス様をお乗せして、『**主の用なり**』で、イエス
様の御心に従う者とならせて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。